

東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

第7回 現地会議 in 福島 速記録

【実施概要】

タイトル：第7回 現地会議 in 福島 ー会津から見える福島の課題ー

日時：2013年9月13日（金）13:30～17:30

会場：会津大学 講義棟2階 中講義室「M2」

（会津若松市一箕町大字鶴賀上居合90）

以下、敬称略

開会

開会あいさつ

栗田暢之（JCN 代表世話人／NPO 法人レスキューストックヤード）

皆様こんにちは。本日はお集まりいただきましてありがとうございます。私は愛知の団体におりますが、愛知にも避難者が1,230人いて、そのうち7割が福島からです。お話を聞くと実に様々な声をきく。「私たちが笑っていたとしても、心から笑っていないでほしい。」と、ある方はおっしゃいました。普通に見えても、のどの奥に何かがかかっているのが現状だと思います。飯館村から南相馬の仮設住宅に避難している83歳のおばあちゃんは「私はここで骨をうずめなきゃならんのかねえ」と言う。…言葉もありません。その中で風化は進んでいます。しかし、ここで皆さんと冗談ではないとしっかり声を上げていきたいと思えます。皆さんとの輪を作るのがJCNの役割です。現地会議もその一つで、今年は3月にいわき、6月に南相馬で開催させていただきました。今回は会津、12月は中通りで予定しています。福島の現状についてしっかり課題を整理して、解決のための会議を続けられたらと考えています。今回は今までと比べると参加者は少ないですが、JCNの参加団体は800団体です。インターネット中継も入っています。今日皆さんでお話したことは、地域担当が議事録をまとめ、参加団体にしっかりと伝えさせていただきます。人数が少なくても800の団体とのつながりをもって、課題解決をみんなで考えていきます。

今日は福島の課題ということで非常に大きなテーマです。中でも会津の課題。私も会津に仲間がいますが「ニラがまったく売れない」と言っていました。課題解決、将来に向けた、何かつかえたものがとれるまで、ご意見を語りあう一日となりますよう、ご来場の方々も含め、よろしくお願ひします。JCNとしては、東京で復興庁との定期協議を開催しています。今日出てきた課題を話し合い、回答を得るということもいたします。今日は一日、よろしくお願ひいたします。

山口巴氏（NPO 法人うつくしま NPO ネットワーク 会津担当理事）

NPO 法人うつくしま NPO ネットワーク理事の山口巴と申します。福島県内での第7回 JCN 現地会議、

共催団体としてひとことご挨拶させていただきます。普段は NPO ロータスキッズと 24 時間対応の保育園、「もくれん」の理事長をしております。あの日は仕事へ行っているみなさんが戻られるまで子どもたちを守っていました。何度も続く揺れに、子どもたちは声を上げる事も出来ず震えていました。東京電力福島第一原発が次々に爆発し、避難している人の子どもの顔も面倒を見ました。今もその時の子どもたちの顔を忘れる事ができません。

安倍首相が五輪招致の場で「汚染水はコントロールできている。私が責任を持つ」と発言されました。その言葉を福島の地できけたらどれだけ心強かったことか、と思います。あの日から 2 年と半年、地震・津波・原発・風評・風化・消費の「6 重苦」である 3.11 は終わっておらず、支援のニーズ、方法、支援拠点のあり形も変わってきている。被災者の自主的な活動を尊重しながら、今は行政、企業、地域の皆さんの質の高い連携が必要な局面であり、さらなる連携・連帯を強く呼び掛けたいと思います。

うつくしま NPO ネットワークは、会津若松市社会福祉協議会、鈴木康さんご協力のもと大熊町連携会議を、まちづくり喜多方の蛭川さんや芋麻倶楽部さんとは、発災直後からいわき基地で大変お世話になり、オール会津で大変お世話になりました。今日は私もみなさんも何かつかむことができたか…と思います。本日はよろしく願いいたします。

情報提供

鈴木亮（JCN 福島現地駐在員）

今回の現地会議を企画するにあたって私が地元の方々を回らせていただき、現状や課題をお聞きしながら、どういう現地会議であればお役にたてるかを考え、企画をしております。昨年は二本松で農業の話、いわきでは津波被害と仮設住宅、南相馬ではお医者さん、保育園の除染などについて、今回は会津地方でぜひやらせていただきたいと考え今日をむかえました。残念ながら、大熊町の方々、自主避難の方々にご登壇いただくことが難しいということで適いませんでした。

お手元の資料に、大熊町の方々の最新の状況という資料がございます。増減が毎月刻々とあります。福島からは出て行かれた方がいる、いわきに移られた方がいる、会津からは減っている。そんな中で、今回の会津の現地会議では、こちらの方々がいま、どんな状況にあり、避難者支援のこれからがどうなっていくのか、地域の再生がどうなっていくのか、その二つが融合できるのか、などを考える現地会議となりましたらと思っています。よろしく願いします。

テーマ 1 「知る」 — 住民と支援組織の地域課題 —

会津地域で活動している団体・機関の活動の事例を、避難者支援と地域づくりの視点から整理しました。

鈴木 康 氏（社会福祉法人 会津若松市社会福祉協議会 福祉課長補佐）

会津若松市社会福祉協議会の鈴木と申します。雑用その他、被災者支援で現地まで行く足軽のように活動しています。発災後、現在、これからという順でお話をさせていただきます。発災当時、私が撮った 3 月 12 日の写真です。町の様子です。磐越自動車道が使えず、食料品、衣料品、日用品が途絶え…（うつくしま NPO ネットワークの）山口さんに粉ミルクなど、避難されてきた人と、若松市内で連携してき

たお母さんの分とを確保しました。3月11日までは社会福祉協議会で介護サービス事業・子どもクラブなどをしていました。1直後から沿岸部の支援ということで向かいましたが、原発事故があって、阿曽市で13日朝、戻されました。

その間、災害ボラセンを立ち上げました。支援の電話をいただいて、やりますと答えた。発災後から避難所を閉鎖するまで、支援所の支援物資集積所では、避難所の運営、支援物資の支援と運営、ボランティア募集・派遣・コーディネートが最初の柱になりました。支援物資を募集したところ事務所で身動きが取れないくらい、通路も埋まるくらいの衣類を入れてもらいました。写真は通りがかりのみなさんから支援をもらい、山積みになっている様子です。

そのあと13日の夜に会津総合体育館という一番大きな避難所の設置が決まって…あの時、田村市から避難してきた方が避難所を探していたのが記憶に残っています。総合体育館には職員が張り付きました。中・高・短大の近くの避難所にはボランティアを派遣しました。災害にたずさわられる職員は7名でしたので、13日から3交代制にしました。通常業務を回しながら炊き出しの支援をしました。他に物資の集積所など7月30日まで行いました。配る工夫など重ね、最後はほとんどの物資がなくなって、集積所を閉鎖しました。

3月25日には大熊町が会津若松に移転しました。8月1日には大熊町の社会福祉協議会に生活支援相談員として応急仮設住宅と借り上げ住宅を訪問する相談員を設置、12か所は会津若松市にあるので、訪問を重ねました。8月から、浪江・双葉・郡山・福島からも多くの避難者が来た。寄り添い支援として「被災13市町村の社会福祉協議会に協力します。訪問活動をしますよ。」と呼びかけた。職員を派遣し、顔の見える関係をつくろうと取り組み、同じ組織の職員同士で情報を集めた。県内の社協でもなかなか顔の見える関係づくりは難しかったが情報共有を続けた。NPOと社協と市民のそれぞれの得意分野を、競争するのではなく、お互いが補い合う関係性をつくればと思っています。

今年の6月30日時点で、避難者は3,925人、お子さんの就学にあわせて移動が多くみられる。今後の課題は避難者の方が疲れていること。避難しながら支援もしている社協職員も疲れている。私たちの仲間も疲れている。なるべく寄り添えるようにしようと、支援を続けている状態です。

渡辺 敏正 氏（檜葉町宮里仮設住宅自治会 会長）

檜葉町避難者の会津美里にある仮設住宅自治会長をしている渡部です。よろしくお願ひします。こういう場に立つのは初めてで緊張しています。檜葉町は最初はいわきに2週間ほど避難しまして、その次に会津美里町へ避難しました。昔から姉妹都市という事で交流があったためです。入った当初は500人ほどでしたが、今は230人ほどです。約半分に減りました。半分の方々はいわきに移っていったが、仮設住宅・借り上げ住宅がなかなか見つからないと聞きます。

自治会は前会長が立ち上げ、1年目は私は副会長をやらせていただいた。2年目、前自治会長がいわきに仕事の事情で移ることになり、会長を引き受けました。去年は秋に河川敷の掃除をした。檜葉町では冬まつりというものはやらないのですが、こちらではやるということで、やりました。仮設住宅はAからH棟まであり、それぞれの棟に班長がいて、全体の自治会長・副会長を選びます。私はありがたいことに連絡員の仕事をしながら自治会長の仕事をやらせていただいていますので、仕事をしながら挨拶して回って、だんだんと皆さんからも挨拶をいただけるようになり、良い関係を築いてこられました。仮設住宅も隣と距離があるので、トラブルがないのがありがたいです。

しかしお年寄りが増えてきたので、社協と連絡をとりつつやらせてもらっているが、訪問はなかなか大変で、社協さんが家を一軒一軒回ってくれています。私は自治会と連絡員をやりながら団体を回る。社協さんが年配の人を回っている。孤独死のようなことはまだない状況です。私は周りから助けられながら運営している状況です。

安達 忍 氏（会津美里町町民活動支援センター準備室 サポートみさと）

サポートみさとは会津美里町の中で公益的な活動をされている個人や団体を応援する組織です。震災時は災害時協定を結んでいたのが現在も活動をしています。今、渡辺さんからお話があったように、自治会もしっかりしているし、檜葉町の役場も移転してきているので、うまくまとまっています。会津若松市には12か所、ちらばって仮設がありますが、会津美里町は1か所だけです。広報誌を月に1回だします。役場でも広報誌を出していますが、内容は報告が中心です。私たちはできるだけ告知をして、会津美里町のイベントにも参加していただけたらと活動している。夏祭りは、自治会が中心になって企画するのをサポートしています。「はなふき」という伝統があるそうで、それを教わって作ったりもしました。地元の中学生在がカラオケ大会に加わったりもした。自分たちで何とかしよう、というのを妨げない後方支援をしていこうと考えている。これからも続く避難者支援、地元と溶け込めるような仕組みづくりをサポートしていかないとはいけないと考えています。

渡辺

最後まで自治会長を続けられる限りはやっていきたい。子どもと嫁はいわきにいる。若い人が少なく年配が多くなる中、これからは年配の方の支援をお願いしたいと思う。子どもへの支援は多いけど、これからはお年寄りへの支援があるとうれしい。あと何年かかるかわからないけど、よろしく願います。

徳田太郎（テーマ1 進行担当：NPO 法人日本ファシリテーション協会）

高齢の方が増えていますが、こういう支援やサポートがあるといいなと思うものは何ですか？

渡辺

やはり娯楽ですね。引きこもっている人が多いので、外に出る機会があるといいです。

徳田

安達さん、交流の場に避難者以外もどうぞ、ということをやっていたが、実際にどの地域から人が来るんですか？

安達

今現在はやはり檜葉町の人メインで、借り上げ住宅から来る方もいる。会津若松から通う人もいる。社協の人いわく、美里町の人でもOKなので、お茶でも飲んでいって…という場所にしていきたい。現状は檜葉町の人が多いですね。

稲村 久美 氏（株式会社まちづくり会津 サポートマネージャー）

株式会社まちづくり会津のサポートマネージャー、稲村と申します。まちづくり会津は第3セクターの会社で、目的は中心市街地活性化。2008年11月から活動。まちづくりという本来の事業がある。今年の4月から「コミュニティ結」というものを始めました。そのベースが、「あいづひまわりプロジェクト」

です。2011年3月から、何かしなくてはと思っていました。社員皆、毎日テレビを見て、被害、津波の状況を毎日目にして、自分がやるべきことを模索していた。ここで初めて出会ったといってもよいくらいの4人が、何かしなくちゃと立ち上がった。実行委員やメンバーは主婦を中心に、ひまわりが放射線を除去するかもしれないということで「とりあえず種まいてみっぺ」ということで始めました。結果はかなり厳しいものでした。このまま続けていいのか悩みました。私たちは結局、何がしたいのか、何ができるのかを再度考えましたが「笑顔をつくっていくことを続けていこう」と決めました。資金もなく、家事もやらなければならなかったけど、行動力だけはあったんです。お仕着せのボランティアはやめようとか、日常でできる事をしようとか、と思いました。活動が遅くなったりご飯を作れなくて家族に怒られたりもしました。でも「どうせやるなら1年や2年じゃダメ、5年はやらなきゃ!」ということで、「あいづひまわり5か年計画」を策定しました。子や孫のことも考えながら、今必要なことを常に考え、20年後、30年後の未来を考えることをしようと活動しています。資金もないので、種を寄付いただいて、500円で売ったりしています。福島県のサポート事業にも申請しています。3か年計画で、1年目は情報提供と交流の場づくり、2年目は心の変化へのサポートや生きがいがづくり、3年目は自立を目指すことを考えています。

今までの活動ですが、1年目はひまわりを植えました。なかなか休耕地がある中、貸してくれませんが、会津坂下の春日八郎の記念館の隣のビオトープやっている団体が受け入れてくれました。その後、大熊町と相談して、交流会を開催しました。商工会の大塚会長にお願いして座談会を開催しました。そこでダンスも披露しました。2年目もまたひまわり蒔きました。心の問題に取り組むため、心のケアの講習を受けたり仮設住宅を回ったりしました。2年目の最後に、交流会をしていたら行方が分からなかった人同士が初めて再会するということがありました。こんな小さな会津でも仮設住民同士の交流の場はないんだなとその時思いました。3年目はほうき草のタネを蒔きました。ほうきプロジェクトに関しては大熊町さん中心でやっていきたいがなかなか難しいです。最初はOKしてくださったが、生活が安定してくると、他に自分たちもやりたいことがあるようで、残念ながら失敗してしまいました。それは皆さんが元気になった証拠だと思っています。Facebook やブログで頑張っって情報発信をしているので見てほしいです。

「コミュニティ結」ですが、会津稽古堂という所の前にあります。目的は、会津に住む人も避難してきた人も仲良く一緒にやろうよ、という意味をこめて、リアルな情報交換の場となること願ってこの名前にしました。中心市街地にあり、街なかに来た人にはわかりやすいです。1階がお食事ができる場所で2階がコミュニティスペース。みんなが作った作品を展示しています。この場所でまちづくりに関心ある人や避難している人が混ざっていただける企画をしていきたいと思います。仮設住宅にしながら、商売を始めたいという方もいる。「おたがいさま通信」を出しているサポート美里の方とも協力している。先日も子育て支援の一環としてベビーマッサージをやりたいと講師として2名が手を挙げてくれ、今は若松の方が教えています。子連れのお母さんも来たり受講の人数も増えています。

徳田

住民と地域組織の支援活動についてですが、いずれもやはり「連携」が大きなキーワードですね。社協同士、地元と避難者、社協と企業やNPOの連携等々、やはりその中には苦労・難しい点がある。安達さんのおっしゃっていた、自立や自治を妨げない後方支援など「妨げない連携」も今後考えていく必要

があると感じました。ありがとうございました。

テーマ2「学ぶ」— 福島の問題と支援のヒント —

テーマ1の事例を踏まえ、支援のヒントとなる取り組みについて共有しました。

蛭川 靖弘 氏 (NPO 法人まちづくり喜多方 代表理事)

蛭川ともうします。コミュニティFM局をしながら、NPO ではまちづくりをしています。ラジオ局と兼任していた中で、NPO の代表になりました。大震災後はほとんどNPO に従事しています。喜多方は蔵とラーメンの町です。ラーメン屋の数は120件/人口5000万人。蔵も多く、4軒に1軒は蔵を持っている。畜産業も盛んです。農業も盛んで米やアスパラガス、きゅうり、ミニトマト等が特産です。喜多方市民は喜多方ラーメンが好きです。フリーアナウンサーの唐橋ユミさんは喜多方のほまれ酒造のお嬢さんです。その他、様々な催し物があります。NPO 法人としては、一番の課題は人口減少だと考えています。平成22年のデータですが、20代の階層が人口の7.8%、4,400人しかいない。全国そうだと思うが進学や就職で地元を出てしまってその後は帰って来づらいなと思う。帰ってこないの子どもは地元で産まれないという状況で、年間約2%ずつ人口が減っていて、50年先には半分くらいになってしまうかもしれないと心配しています。

そんな中で震災がありました。それまでは「わかりやすい環境保護」を掲げ、ドイツの自転車タクシーを広めていました。2010年からは「まちづくり喜多方」と名前を変え、地域コミュニティの再生に取り組みました。会津では60年間で3万人人口が減少していますが、世帯数は増えている。家族の人数が減って世帯が増えているんです。国の経済政策の結果だと思うが、建築業は潤うし、家電も広まる。震災以降、大きなテーマではあるが、そうした「経済活動からの脱却」というものをあげています。2009年度は年間2000万円で運営していた。今後震災を経験して私たちが目指すことは、「生きる・つなぐ・学ぶ・継承する」というテーマです。

震災当日はラジオ局にいました。震度5弱でしたが真っ先に警察と消防に電話しました。緊急放送を流して、自分で車を運転して町を回りました。喜多方は、道路のひび割れもなく被害は少なかったです。そのあと行ったのは、被災した子どもたちの支援でした。喜多方ラーメンの炊き出しなどをしました。その時、NPO のメンバーと「できることは何でもやっとう、オール福島でつながろう。」と話しをしました。社協に集まって、阪神大震災の時にNPO がどんな活動していたかについて勉強会もしました。勉強会の時に「あなたたちも被災者です。非常に息の長い活動になるので、全力ではなく、地道に長く活動続けられるようにしてください」とアドバイスをいただいたのが印象的でした。

そこからまず手掛けたのが、仮設住宅を建てる際に地元の間伐材を使って、かつ住宅が終わった後も住宅の建設に使えるようにしようということでした。いわき市と会津地域で採用されました。筑波大学と連携して。三島町の佐久間建設工業にも協力いただいた。仮設住宅の住民さんからは住みやすいという声をもらっています。

次に、力を入れたのが除染でした。国が示した0.2 μ シーベルト以下、という基準に沿って、基準以下のところは市は除染しないと仰いました。震災直後から京都から除染の研究をしている先生がいるということで、実証実験に協力しました。国が行っている除染と違って地域住民ができる除染を「自力除染」と名付け、福島市で勉強会をしました。郡山市長にも興味を持っていただきました。それでボランティア

アで除染をしてみようかという話になっています。そうしたことをやるにもお金が必要でした。電力の固定価格買取制度ができたので、自前で太陽光発電つくって、電気を売って収入にしていればと今建設中です。12月に完成予定です。200KWだと、700万～800万の収入になる。半分は銀行への返済になるが、残りの半分を自由な予算にして、これから19年続けようと思っています。

風評被害で観光客は30%減りました。風評被害の実害で一番深刻なのが放射能汚染という実害。必要なものは「実害除去」だと思います。連携が必要だということで、大学や地域住民との連携に力を入れています。福島の課題は日本の課題です。原子力は経済を進行させるためのわかりやすい建物だったと思います。問題を先送りするのではなく、今解決するということで、まちづくり活動から日本を変えていきたいです。

菅野 雅弘 氏（葛尾村 総務課 復興対策係長）

葛尾村は現在も三春町に避難している。会津地方にも大変お世話になっている。支援を受けてなんとか避難生活を送っている。まず感謝を申し上げたい。葛尾村は浜通りではありますが、比較的中通りに近いところに位置している、人口1,531人の村です。葛尾村では3月14日の国の避難命令は届きませんでした。市長判断で全村民が福島市へ避難しました。その当時はどこへ避難するか決まっていたわけではなく、最初は会津坂下町に役場を4か月おいて、今は三春町に移動しています。住民の53%が仮設住宅に入っています。残りのうち35%が県内県外の借り上げ住宅に避難しています。避難先のばらつきという意味では、三春町に57%が避難、周辺の郡山市、田村市も合わせると村民の84%が役場周辺に集まっていることになります。現在、原発周辺の他の町村は「仮の町」を作ろうとしているが、葛尾村ではすでに三春に仮の町ができているという認識でいます。

学校教育関係では平成23年9月に幼稚園を三春で開設しました。小中学校は区域外就学をお願いしていたが、平成25年4月から三春町の中学校に葛尾の小中学校を運営しています。現在生徒は小中学校合わせて20名。8月には幼稚園も小中学校の敷地内に移設し、現在6名が通っている。

村の抱えている問題はいっぱいありすぎて書ききれないほどある。まず除染が進んでいません。今年9月10日に計画の見直しの報道がありました。今年度終わる計画だったものが、今年度には終わらないという内容でした。住民アンケートも実施しています。「将来、村に帰りたい」が3割、その中でも「すぐに帰りたい」という人が1割。帰村率の問題が今話し合われています。将来の課題としては、災害復興公営住宅の建設や家賃はどうなっていくのか、村に戻ってからの学校や産業がどうなっていくのか、という問題が曖昧なままになっていることです。帰ったほうがいいのかそうでないのか？という迷いが住民の中で大きくあります。政策について心配なのは、高齢者と子ども向け団体への施策はあっても、若者向けの政策がないことです。若年層への政策が必要ではないかという課題に今、ぶつかっています。

村の協議会は、復興委員会の下部組織として発足しました。そのままだと会議等には年長の方の意見だけで若い人の意見が復興計画に入っていないかと思いましたが、若い人の意見を取り入れられる場を組織しました。毎週水曜日に集まってやっています。開催して10回程度までは苦情が続いたが、ずっとやってきた。途中から「こういう村だったら戻りたいね」という話が少しずつ出てきて、全部で39回行いました。そこで出された若い人の声が、村の第1次復興計画に反映されたことで一旦は役割を終えることにしましたが「せっかく若い人の集まりができたのだから、これからも村づくり協議会を将来作

りましょう！」ということで、村づくり協議会設置準備会として続けています。誰がどうすすめて、どうチェックするのか、これも31回ほど話し合いをしました。平成25年8月に、「かつらお村創造（づくり）協議会」として、若者で村づくりをしていこうという話になっています。

この会の目指すことは4つです。1）企画、自分たちの出来る事をしていこう、2）文化、伝統を残していくこと、3）産業、若手農業者育成含めて、4）政策、村に政策提言をできたらいい、将来法人化できたらすごい、と思っています。ステップアップということで、イベントの企画を行い、住民や役場に知ってもらうことから始めました。教育関連の組織やスポーツクラブなどほかの組織と一緒にやりました。それが形になってきたところで、後継者や人材の育成をしようと思います。村の中の受け皿として十分に認められ、行政に対して政策提言ができるようになろうと思っています。活動の様子ですが、先進地の研修をしました。山形県最上町では町ぐるみで、子どもが主役の町づくりをしていることをお聞きしました。メンバーの中には、放射能で汚染された地域でどうやって農業を再建させるかという意識で宮城県の植物工場を見学したりしている者もいます。

葛尾村の人たちが、去年12月に、バラバラになっている子どもたちが集まる機会を作りたい、ということで、クリスマス会を開きました。資金はなかったので、他の団体に呼びかけて労働組合とか住民から機材を借りてイベントを開催しました。今年も開催しようということで、毎週火曜日、協議会で準備を進めています。

今後の課題は、メンバーそれぞれ考えている方向性が異なる面を、すりあわせて共有していくことです。村民の参加数がだんだん少なくなっているの、どう増やしていくか、というのがあります。まずはイベントで実績を積んで、住民の受け皿になりたいです。より多くの住民の参加、特に若者の参加を促し、定期的なイベントを開催して住民の参画を募っていきたいです。他団体との交流したいです。スキルアップや研修、再開される検討調査会への参加などをやっていきたいと思っています。

尾崎 嘉洋 氏（NPO 法人 苧麻倶楽部 事務局長）

私たちの取り組みは、成功事例でも何でも無い、うまくいっているかはわからない。でも状況とか現実には変わっている。本質的な部分は、震災後も前も変わらないということ今日は共有したいです。まず奥会津・昭和村についてですが、写真は村の風景です。山の中にある集落が10件あって、一つの村です。人口は1403人、高齢化率は54.5%。典型的な超少子高齢化です。ミッションは、過疎化、経済価値に重きを置いたことで失った自身を取り戻すことをしています。地域の継承する担い手を持続させ、地域に根差した生き方をしたい人もふえています。例えばギリシャでは20代の失業率が50%だそうで、皆生きるために農村へ流れているんだそうです。日本もこれからそういう時代になるのでは？と思います。その前に地域に大切なコミュニティや文化を継承しておこうと私たちは思っています。

震災前に戻ることは難しいです。どこへ向かえばいいかわからないが、多様な思いをつなげる場づくりとか、地に足のついた取り組みが大事です。実践としては2007年からワークキャンプを行っています。震災後に海外から3名ボランティアが来ました。ポーランドから8歳の時チェルノブイリ経験した人、アメリカ先住民族の方とかです。メキシコ、イタリア、イギリス、台湾などからも村に来ています。彼らが何を目指しているのかというと、暮らし方、生き方などを学びたいという思いできているようです。

風評被害はあるけれども、顔が見える一人一人が発信役になることが大事だとおもっています。Facebookとかで台湾のひとが昭和村の体験記をつづってくれて、それを出版してくれた。それを読んで、

また来てくれている人もいます。若者のイベント「フジロックフェスティバル」でもPRをしています。震災があって、観光として福島に来る人は少ないですが、今だからこそみんな学ぶチャンスだぞ、と言いたいです。ピンチだからこそチャンス。高齢のかた、今70代の方々がから教われるのも、今しかない。何が生きる根っこになっているのか、教えてもらえる最後のチャンスなので、今「村キャンパス」というものをつくっています。現場にかかるストレスとして、支援する・支援されるという関係には限界があると思っています。ともに未来をつくる、仲間として、どうやって共感を作っていくかが大事だと思います。

栗田 暢之（JCN 代表世話人／NPO 法人レスキューストックヤード）

非常に短い時間の中でお話を頂きました。それぞれの団体が地道にまじめに、またビジョンを出すために必死に取り組んでおられる。しかしテーマ1は、本音が出たのかな、と感じます。檜葉町宮里仮設住宅自治会長の渡辺さんがお帰りになったので、サポートみさとの安達さんにご登壇いただいて…。美しい話だけではないですよ。ちょっとここで本音を出していただきたいと思います。まずは社協の鈴木さんにトップバッターとして、このテーマ2で思い切り本音を出していただきたいんですが。ここまでの時間で、会津が抱える課題があまり出ていないのかな…。会津も被災した。奥会津を含めて、風評被害が深刻。そのあたりをまず、鈴木さんから…。

鈴木

実際に人・モノ・カネ・情報という意味では、緊急避難申請を会津若松で扱ったのは1,267件でした。払い出したお金は1世帯あたり10万円とか20万円でしたので総額で1億くらいですかね。申請の内訳は、避難をしてる方が150件、残りの1117件は、会津若松市在住の方なんです。どういうことかという結局交通網が遮断されて、観光客が来ない、温泉も避難所になった、働く場所もないということです。避難して温泉に長期滞在している人は、申し訳ないから掃除は自分たちでやる、という。しかしそこで働いていたパートの人たちは、仕事を失い、孫にお小遣いをあげられなくなる。「八重の桜」ブームは特需でした。会津もブームが終わったらどうなるか心配です。放送が終わると途端にパタンと元に戻る。不安は観光だけでなく、農地なので、酒も有名ですから、関東方面で売っていたものがパタンと売れなくなったという声は現在進行形の話です。

栗田

そういう状況を抱えながら、避難者を受け入れている。蛭川さん、喜多方では風評被害の状況はいかがでしょう？

蛭川

福島はグリーンツーリズムの先進県で、喜多方へ社会科見学で生徒さんがきているんですが、平成22年は小学生中心に7000人、震災の年は0人でした。当然の事。原発事故があり、小学生をわざわざ福島県に連れてくることはできないんです。31軒の農家が改装をして宿泊施設を作ったのに、まったく来なくなりました。24年度で若干戻りましたが、福島県内からの客がほとんどです。観光客は、平成22年度を100とすれば、23年度で70、24年度で80、25年度で90まで戻った、という状況です。福島県産の

野菜はなかなか買ってくれないです。東京の中野に4か所ほど展開していたお店は戻ってきてしまいました。

栗田

福島県がもともと抱えていた課題とどう向き合うのかと、すべては未来の子どもたちの幸せにあるのだ、というテーマを論点にしつつ、「日本を変えよう」ともおっしゃってますが、福島の復興の問題と、喜多方の過疎化の問題を、どのように整理して、どう外にアピールしていくのか、お話いただきたいんですが。

蛭川

原子力発電所事故については、未だに、国も誰も、失敗だったと認めていない。いまだに15万人の県民が避難している状況で、原子力発電所を作ったことを失敗と認めていない。経済を追求していった結果、家族でさえも連携が取れなくなったこの現状に…。

栗田

疑問もりましてね。太陽光の電力を取り入れるとか。同じまちづくりと思っている稲村さんは蛭川さんとはご関係ありましたか？

稲村

いえ、まったくないです。まちづくり会津は、中心市街地を現場にしていることをご理解いただきたい。

栗田

互いにエールを送っていただけるようなコメントをいただけますか

稲村

まちづくり会津は、TMO（注：タウンマネジメント機関（Town Management Organization, 中心市街地における商業まちづくりをマネジメント（運営・管理）する機関）という中心市街地の活動をしている珍しい組織です。コミュニティ結をやる時も、役員の中には「なぜやるのか？」と問う人もいた。しかし、やはりまちづくりは地域づくり。私も蛭川さんを見習いながら、喜多方のエッセンスを入れていきたいです。

栗田

今回は会津に来られた方の支援ということで交流の場を持ったり、作品の展示をして売っていこうとされている。支援者と地元の人との融合に焦点を当ててらっしゃる。蛭川さんの場合、そもそも喜多方の持っている課題について取り組んでおられる。そういう違いはあれど、やはりまちづくりは人づくりなんだ、そして地域が持っている大いなる自然や田舎の魅力を発信していこう、という所は共通していますね。

続いて菅野さん。会議が多すぎるんじゃないですか、31回。素晴らしいですが、本音が先ほどでしたよね。役場の人が多すぎて住民の参加が減っている…と。そのあたりをお話ください。

菅野

はい。さきほど、高齢化の話をしていただきました。葛尾村は 31%が高齢化と高い。逆に若い人たちの危機感がないのかなど。しかし、震災で役所が遠くなってしまったために、自分の村を何とかしなければ！と危機感が出てきたんです。会議の回数が多いのも「来週もあるので、今週はこれくらいにしようか」という感じになってきていて、いろいろなものが決まらなくなってきているのが実情です。

栗田

なるほど。さきほど会議の写真を見させていただいて、あまり楽しそうじゃないなあと感じたんです。日本ファシリテーション協会のように、会議をまとめるプロなどの第三者の目が入り、成果として出してくれる人を入れたほうがいいのでは？。若松社協の鈴木さんは、福島社協では第一人者ですよ。会議の工夫についてはどうしていますか？

鈴木

（日本ファシリテーション協会の）徳田さんには、講師で来ていただいたことがあります。ホワイトボードに、みんなが意見を出し合う。それを誰が整理するの？ということになって、それを学びにいきました。今日は再会を果たした。

栗田

難しいという事でしょうか。何とかしたい…という熱意はあるじゃないですか。

鈴木

支援者が疲れてしまうという話をしました。原発事故と地震があった当時は、みなさん多分 100 メートル走の選手だった。半月くらいたって、400 メートル走ランナーになって、3 年目を迎えて 42.195 km になって、今は間寛平のように地球一周走ります、というくらいのペースにしなければ、自分自身が煮詰まってしまうんですよ。バーンアウトしてしまっただけじゃないと思う、今は地元の大学の先生と一緒に走り続けるようになった。

栗田

菅野さんもそういうパートナーを見つけられるといいのでは？

菅野

そうですね、そういうパートナーを見つけたいです。

栗田

若者が少ないということについて、全国的な問題ではあるが、なんとかしたいと思っている人たちはいる。いい情報発信をすれば、見てくれている人たちもいるはず。ぜひ具体的な課題をはっきりして、粘り強く求人していただければ、アドバイスいただけると思います。役場としては菅野さん、係長としていつまでに何を達成しなければいけない、という期限があるんですか？

菅野

ええ、葛尾村の帰村の目標としては、平成 27 年の 4 月に葛尾に役場を持っていきたいという話があります。

栗田

除染が進んでいないという話もありました。あと 1 年半。役場だけ戻っても仕方がない。そこに当たり前のように商店街があって、交流のスペースがあって、人が来て、という風になればいいが、厳しい状況がある。でも情熱は伝わる。会津の中で、つながるネットワークができそうな予感が感じられました。尾崎さんは、町の過疎化とか、若者の流出とか、昭和村がいいとか、尾崎さんがそこを活動の場所として選んだんですね？

尾崎

はい。もともとは「誰もが知れる村づくり会議」というのが前身としてありました。そういった方たちが村の現状調査をして、後継者がいないとか、空き家が多いとか、調査の中から課題を考え、誰が主体的に解決するのかという話をしていました。自分は 2 年目から混ぜていただきました。私はもともと埼玉の出身ですので…。

栗田

菅野さんとまったく同じ課題なのでは？よく似ていますよね？若者がいない…どうしていきますか？

尾崎

「若造」が受け入れられています。まだ移住して 5 年で毎日学びですが現状がどうか、しがらみがどうか、そういうのはあまり知らなかったんです。それが、色がついていないということで「村を何とかしたい」という想いを持つものとして、地域の中にもそういう方々が何人かいらっしやって…。でも気軽にそれを言えなかったり、会議がたくさんあるけどメンバーは毎回同じだったり…、そういうときに気軽に「こうやっていきましょうよ」とか言える立場になれると…。

栗田

「よそ者」が果たす役割は大きいんですね。尾崎さん自身が、そこに入って、外から見たら村民に見える。葛尾村にも飛び込んでくれる人がいてくれたら大いに助かりますよね、いい話ばかりではないにしても、地域のローカルルールもいろいろあったり、スピード感も都会と違うのでは？

尾崎

暮らしのリズムや、物事の進め方がとても違いますね。一人ひとりでテンポが違うんです。こう DNA に刷り込まれているというか。じいちゃんばあちゃんは、一年の過ごし方が洗練されているんです。3 代前、5 代前、10 代前から自然と培ってきた生活のリズムがあると思うので、しっかりそこに身と心を置いていくことが大事です。あとは自分の場合は、地域に入って消防団でパトロールとかしていくなかで、団の中に 30 年以上地区を守ってきた人たちがいて、自らで守るんだという価値観があることに気づ

いたんです。そういうものをちゃんと共有できる若者が入ってきたら助かるということはあると思います。

栗田

なるほど。仮設住宅の方々が昭和村とかに行ってみたらいいのではないですかね？安達さん。渡辺さんも今日は緊張していらっしゃるが「日々落ち着いています」と先ほど話されてましたけど、本当のところどうですか？。

安達

渡辺さんは、いわきに奥さんとお子さんが戻られて、ご自分は会津にいるお父さんの面倒を見る事情から会津に残っているんです。そういう子育てがあったりとか介護の問題があったりとか、異なる事情で、戻られる人、残る人がいます。檜葉の人と話していると、つらいとか悲しいとか、あまり言わない印象を受けます。私たちが真ん中に入って、代弁して「忘れないで」と言っていく必要を感じますね。

栗田

土いじりとか田舎暮らしをしに、たまには昭和村に行って尾崎さんの所と交流するのもいいかな…と思うんですが。

安達

美里町でも十分できますけど（笑）

栗田

檜葉の方々は強制避難で、自主避難の方々もいると思いますが、関係性などはどうですか？

安達

美里町にも何世帯か自主避難されているかたがいると聞きますが、ほとんど把握できていません。お年寄りの方で自主避難されてるかたがありますが、珍しいケースです。その方は免疫の病気があって、美里町で一人ですまれています。一番支援の手が届いていないのが自主避難の方だと私たちも肌で感じています。

栗田

誰かが見ないといけない、重層的なネットワークが必要ですよね。避難した地域によって受けられるサービスが違うというの私、おかしい話だと思うんですよ。ぜひそのあたりも目を配っていただけたらと思います。

鈴木

自主避難者については会津若松では今年の6月30日時点で90人36世帯です。13市町村から会津若松市に避難されています。「自主避難者の会」として、おしゃべり会が開催されています。NPOやNGOのかたにもお声掛けさせていただいたり、ボランティア連絡会として支援をさせていただいています。やはり子育て経験者がお話されるのが一番ですね。今日ここにきて皆さんとお会いできたので「こちらに来

てください」ではなくて、こちらからもっと出向いていきたいと思います。

栗田

子育てと言ったら山口さんでは？

山口（参加者席から：NPO 法人うつくしま NPO ネットワーク 会津担当理事）

私はもともと保育園を地元のお母さんの支援ということで始めたのですが、立ち上げた翌年すぐに震災が起ったので、以降はすぐに避難されてきた方の子どもたちでいっぱいになりました。今現在もそれは続いています。地元の方々よりも避難されているお母さんのストレスとか、精神的に不安定な子どもたち、分断を抱えるお母さん方、子どもたちと向き合っていますが、保育士、資格者など支援者もかなりストレスを感じていますね。

栗田

そうですか、ありがとうございます。ぜひ社協さんも含めて、いろいろなネットワークで、誰かが支えるという事を願うわけです。与えられた課題は一人ひとり本当に違う。それをこれからも訴え続けていこうと思います。支援者側がしっかり発信し続ける。具体的には、渡辺自治会長からは「やっぱり娯楽が欲しい」蛭川さんからは「観光に来てほしい」というのが切実な願いとしてありました。尾崎さん、菅野さんからは「若者やよそ者をぜひ受け入れて、一緒に考えてください」と要望があった。具体的な要望をしっかりと発信していくということが、これからも必要だと思います。ただ先は長いかもしれませんが、お互い支えあいながら、情報交換もしながら、あるいはJCNのような場も利用していただきながら、恵まれた大自然、環境をいかに生かしながら、このフィールドに絵を描いていくのか、引き続き一緒にやっていっていただけたらと思います。これでテーマ2を終わりにいたします。ご登壇の皆さんに拍手をいただいて…皆さんありがとうございました。

（拍手）

テーマ3「つながる」— 参加者を交えた意見交換・情報交換 —

登壇者と参加者でグル登壇者と参加者でグループディスカッションをおこないました。

【ファシリテーター】

徳田 太郎 氏（NPO 法人日本ファシリテーション協会）

※グループディスカッションのため記録不可

閉会

閉会あいさつ

中鉢博之（一般社団法人 ふくしま連携復興センター 理事）

皆様、本日はお疲れ様でした。すごい熱気でしたね。それだけ中身が濃かったのだと思います。お持ち帰りいただくことがいっぱいあったと思います。それはアイデアだったり、ネットワークだったり、

連携だったり…さすがJCNさんの底力と、進行のファシリテーション協会さんのマッチング。

ふくしま連携復興センターは、深く掘り下げる活動や、連携を促進する活動をしています。全国はJCN、県内は連携復興センター…多様な主体が連携しなければ、復興は進んでいきません。皆さんと出会えたことを具体的な成果に結び付けていく仕組みが必要になってきます。現地会議はまた続くと思いますが、成果を持ち寄りあえるように、支えあって生きながら、でも疲弊しないよう活動に励んでいきましたらと思います。本日は皆様ありがとうございました。

以上